

雷かみなりを打ち負まかした女おんなの子こ

わたしは、小さなころから、にいさんと二人つきりで暮らしてきました。家のまわりには、朽ちた柱が何本も、林のように立っていました。昔は、栄えた村だったのですが、いまはもうすっかりさびれています。とはいえ、にいさんは狩りの名人でしたから、食べるのに困るようなことはありませんでした。

わたしは、とても大切に育てられました。たきぎ拾いさえさせてもらえませんが、外の仕事は、一切させてくれませんでした。ですから、わたしはいつも家のなかで、刺繍ばかりしてすごしました。

あるとき、どこからか二人の男がやってきて、わたしたちの家に住みついてしまいました。この二人も、にいさんに負けない狩りの名人で、鹿や熊をたくさん獲ってきたので、囲炉裏の上の火棚は、いつも干肉でいっぱいです。二人ともよく働くので、にいさんも文句もいわず、みんなでいっしょに暮らしていました。

そんなある日のことです。男の一人が、にいさんにこういいました。

「お願いがあります。妹さんをください。気立てがいいし、刺繍もじょうずなので、すつかり気に入ってしまった。どうしても、わたしのお嫁さんになってほしいのです」

にいさんは、困ったような顔をしていいました。

「それはうれしいお話です。身寄りのないわたしたちですから、妹を嫁にほしいといつてく

れるなら、たとえ相手が犬だとしても、嫁にやるつもりでした。けれども、ひとつだけ、条件があります」

「なんででしょうか」

「この家のすぐそばに住んでもらいたいのです。たった一人の妹とは、はなればなれになりたくありません」

わたしも、もちろん、にいさんとおなじ気持ちです。

「わかりました。すぐそばに家を作りましょう。けれど、その前に、わたしの父と母に、ぜひ妹さんを会わせたいのです。すぐに帰ってきますから、どうかお許しください」

「ほんとうに、すぐにもどってきてくれますね。もしも、そうでなかったら、ただではすみませんよ。わたしを人間だと思つて、甘く見ないでくださいね」

にいさんは、念を押しました。

わたしはほんとうは、行きたくありませんでした。にいさんとはなればなれになって、見知らぬところに行くのが、こわくてならなかったのです。

けれども、にいさんのいっつけです。しぶしぶ、旅のしたくをはじめました。

すると、にいさんがそばにやってきて、わたしの耳に口を寄せ、ひそひそ声でいいました。「気をつけるんだ。あの男たちは、人間ではない。狩りに行つても、鹿でも熊でも、傷ひとつなくつかまえるんだ。そして、あつというまにバラバラにして、二匹も三匹もいっぺんに背負つて、空を飛ぶように持ちかえってくる。とても人間にできることではない。」

そんな連中のいうことだから、逆らったら殺しあいになってしまおうだろう。しかたなしに承知したんだが、わたしは、おまえのことが心配でならない。このお守りを持たせてやるから困ったときには、この袋の口を開けるんだよ。そうすれば、きつと助かって、いつかわたしのところにもどつてこられるからね。どんなときも、肌身はなさず、持っているんだよ。わたしはいつだって、おまえの無事を祈っているからね」

にいさんは、小さな赤い布の袋を、わたしの手ににぎらせてくれました。そして、わたしが縫った着物や、首飾りや耳飾りなどの宝物を、荷物にぎつしり詰めてくれたのです。

わたしは泣く泣くにいさんに別れを告げ、大きな荷物を背負い、男たちと出発しました。ふり返ると、にいさんはいつまでもいつまでも、見送ってくれていました。

村はずれから川をさかのぼり、エンジュの木のところまでくると、男がいきなりわたしを抱きかかえました。そして、ビューンと空に飛びあがったのです。

びつくりして下を見ると、なんてことでしょう。ついさっき、にいさんがていねいに詰めてくれた荷物が投げだされ、首飾りや耳飾り、刺繍の着物が、そこらじゅうに散らばっているではありませんか。

それどころか、エンジュの木に、だらんと手足をぶらさげて引つかかっている人がいます。なんと、それはわたしなのです！ まさか、わたしは死んで、魂だけになってしまったのでしょうか。

地上がみるみる遠ざかります。ゴウゴウと風が耳を切ります。



一つの天を抜けると、つぎの天があり、その天を抜けると、大きな村が見えてきました。男たちが舞いおりたのは、すばらしくりっぱな大きな家の前でした。

「ああ、やつと着いたぞ」

男たちはそういつて、わたしを一人そこに放りだし、さつきと家のなかに入つていつてしまいました。どうしたらいいかわからなくて泣いていると、家のなかから、一人の娘さんが出てきました。その美しきときたら、とても人間とは思えません。カムイなのでしょうか。

娘さんは、わたしを見つけると、かけ寄つてきて、こういいました。

「まあ、にいさんたち、しばらく姿が見えなくて、やつと帰つてきたと思つたら、なんてことでしょう、人間の娘さんをさらつてくるなんて。しかも、こんなところに置きざりにして、ずいぶんじゃないの。好きになつたらなつたで、もつとだいいじにしてあげればいいのに。まったく、いくつになつてもやんちゃがすぎるんだから、あきれたもんだわ。かわいそうにね、さあ、こつちにいらつしやい」

娘さんはやさしく手を引いて、わたしを家のなかに連れていつてくれました。

「遠いところからきて、さぞかしお腹もすいたでしょう。さあ、これをお食べなさい」

小鍋で料理をしてくれて、わたしに食べさせてくれました。わたしは、泣きながら、それを食べました。

その日から、わたしはその家で暮らすようになりました。

ふしぎな家でした。夜になると、どこからか、男たちがわらわらと集まつてきます。カムイのようなおねえさんは、大鍋いっぱい料理を作り、男たちに食べさせます。家のなかは、男たちでぎっしりです。けれど、朝になると、みなどこかへ出かけていつて、夜までもどつてこないのです。

おねえさんはいつも、わたしをそばに寝かせてくれました。そして、なにくれとなく面倒を見てくれたのです。ごはんも、みんなといつしよの大鍋のものではなく、わたしのためだけに、小鍋で作つてくれました。わたしは、水汲みだろうとお掃除だろうと、できるだけのことをして、おねえさんを手伝いました。けれど、仕事が終わると、さみしくて悲しくて、泣いてばかりいたのです。

ある日のこと、おねえさんは、わたしにこう言いました。

「人間の娘さん、よくお聞き。ここはね、人間の国ではないんですよ。わたしの父は、雷のカムイです。雷の一族に、毎日ごはんを食べさせ、人間の国に送りだすのが、わたしの務めです」

「そうだったんですか。じゃあ、おにいさんたちも？」

「そうです。雷の一族なのです。人間はね、カムイの国の食べ物を食べると、人間の国にもどれなくなってしまうんですよ。だから、あなたのために、いつも特別に料理をしてあげているんです」

「そうだったんですか。ありがとう、おねえさん。わたし、いつか帰れるでしょうか」

「それはね、あなた次第です。あなたは、毎日泣いてばかりいるでしょう」

わたしは、うなずきました。いまも、涙がこぼれそうです。

「だから、毎日毎日、火のカムイが、人間からの苦情を届けにくるのです。あなたを返してくれといわれています。カムイというものは、人間の言葉に口答えできません。だから、父もほとほと困っています。それで、あなたを早くカムイの国の者にしてしまおうと、父はあした、あなたの力試しをするといいだしました。もしあなたが勝つたなら、人間の国に帰してもらえます。でも、もしも負けたら、あなたはもう人間の国には帰してもらえず、わたしの兄と結婚しなければならぬのです。そうしたら、あなたは二度と、人間の国にもどれなくなってしまうのですよ」

「そんなの、いやです。どうしたらいいでしょう」

「だいじょうぶ。わたしが助けてあげます。この扇を貸してあげますから、忘れずに身につけておきなさい」と、おねえさんは一本のきれいな扇を渡してくれました。

「あす、朝ごはんがすんだら、ぼばさまを呼んでくるようにいわれています。一族の燃える太陽のぼばさまです。そうしたら、あなたは扇の雲の絵のあるほうを自分に向けるんですよ」

「はい」

「つぎに、じじさまを呼んできます。一族の冷たい雲のじじさまです。こんどは、裏側の太陽の絵のあるほうを、自分に向けなさい。さいごに、炎の馬がやってくるでしょう。そのときは、また、雲の絵を自分に向けて自分を守るんですよ」

「わかりました」

「それから、これを貸してあげましょう」といって、おねえさんは、モウルという女物の下着を差しだしてくれました。「さあ、着てごらんなさい」といわれ、身につけてみると、どうでしょう。モウルはすうっと肌溶け、しみこんで、見えなくなってしまうのです。

「モウルが、あなたを強くして、守ってくれます。こわがらないで、がんばるんですよ」

「はい」

「あなたは、自分のお守りも持っているでしょう」

「はい。にいさんからもりました」

「すべての力試しが終わったら、そのお守りの口を開いて、みんなにお返しをしてあげなさいね」

そういつて、おねえさんはクスツと笑いました。おねえさんがいてくれて、ほんとうによかったと、わたしはありがたくなってなりませんでした。

つぎの日のことです。朝ごはんが終わると、雷のカムイに呼びだされました。ああ、いよいよだとわたしは思いました。おねえさんに聞かされていたので、肝もすわっています。

「おまえが毎日毎日、飽きもせずに泣いてばかりおるから、人間の国から苦情がきてかわかない。だからきょうは、力試しをしてもらおう。もしも、おまえが負けたなら、おとなしく息子の嫁になってもらうぞ」



雷のカムイにそういわれて、また泣きたくなりましたが、ぐつとこらえました。
雷のカムイは、おねえさんと呼んで、いいました。

「わが娘よ、燃える太陽のぼばさまを、ここに呼んできてくれ」

「はい、おとうさま」と、おねえさんは外へ出かけていきました。

しばらくすると「いらつしやいました」という声が出て、ぼばさまが戸口から入っていらつしやいました。目が痛くなるほど強い日の光があふれ、やけどしそうな熱さです。わたしは、おねえさんの扇を開き、雲の絵をこちらに向けました。すると、熱さがすうつとやわらぎました。それで、わたしはなんとかやりすごすことができました。

「人間のくせにしぶといな。わが娘よ、冷たい雲のじじさまを、ここに呼んできてくれ」

「はい、おとうさま」

しばらくすると「いらつしやいました」という声が出て、じじさまが戸口から入っていらつしやいました。すると、みるみる寒くなり、なにもかもが凍りついて、火柵から壁から、つららが下がりはじめました。吐く息も凍って、まつげが白くなります。

わたしは、いそいで扇を開き、太陽の絵をこちらに向けました。

すると、寒さがすうつとやわらいで、息もつけるようになりました。わたしのまわりだけ、氷が融けて、足もとを川のように流れていきます。

ほんの少しでも遅かったら、指も凍りついて、扇を開けなくなるところでしたが、こんどもなんとかやりすごすことができました。



雷のカムイは、さもいまいましそうに、こういいました。

「なんとしぶとい娘だ。かわいげもなにもない。よし、外へ出る。これが最後の力試しだ。これに勝つたら、許してやるぞ」

家の外に出ると、そこには燃えさかる馬がいました。体じゆうから炎が噴きだしています。わたしは、むりやり、その馬に乗せられてしまいました。熱くてたまりません。

おねえさんにいわれたように、扇を開き、雲の絵を自分に向けました。すると熱さは少しやわらいだのですが、馬がひどく跳ねます。そして、すごいきおいで走りだしました。

わたしは、むちゆうで馬にしがみつきました。振り落とされそうになるのをこらえて、たてがみをつかもうとすれば、それも燃えています。馬の吐く息も炎、蹴る足も炎、すべてが燃えさかる炎ですが、扇の雲の絵が、わたしを守ってくれました。

馬は、村の上手へ六回、下手へ六回走って、雷のカムイの家の前にもどつてくると、高くいなないて、おとなしくなりました。

わたしは馬からおり、家に入ってきました。家のなかは、見物に集まってきた村の人々でいっぱいになっていました。

わたしが、やけどもせず、あばれ馬から落ちもしないでもどつてきたので、雷のカムイはびつくりして目をまん丸くしました。

おねえさんが、わたしを見て、目で合図を送ってきます。

わたしは、大きく息をつくくと、勇気を出して、こういいました。



「力試しは、たがいにするものです。わたしもさせてもらいます」
そういうと、雷のカムイは、笑って「いいだろう」といいました。

わたしは、肌身はなさず身につけていた赤い袋を取りだしました。にいきさんがくれたあの
お守りです。紐を解いて、袋の口を開けたとたん、ブーンとすごい羽音を立てて、小鳥ほどもあるスズメバチが飛びだしてきました。それも群れで、つきからつきにとめどなく出てくるのです。まつ黒になるほど人々にたかつて、刺してまわります。

ふしぎなことに、わたしは刺されません。にいきさんがくれたお守りだから、きつと守られて
ているのでしょう。

雷の村の人々は、キイキイと叫び声をあげて、のたうちまわりました。すると、目の前で
みるみる蛇の姿に変わっていきます。くねくねとものがき、からみあい、苦しんでいます。

雷のカムイがいました。

「わかった、わかった。もういい、やめてくれ。村の者をみんな殺してしまったら、おまえ
を人間の国に連れて帰る者もいなくなってしまうぞ」

「帰してくださいるんですね、人間の国へ」

「ああ、帰してやるとも」

「約束ですよ」

「ああ、約束だ」

わたしは袋を開けて、高くかかげました。

スズメバチは、いつせいに袋に飛びこんできました。あんなにたくさんいたのに、小さな袋に入ってしまったのが、ふしぎです。

「ああ、参った、参った。息子が、人間の女などに惚れるからいけないのだ。火のカムイからも、早く返してやれと催促されている。おまえが力試しに負ければ、息子の嫁にすることもできたのだが、残念ながら、そうはいかなかった。しかたない、明日、人間の国に帰してやろう。どうか、機嫌を直して、その袋を二度と開かないでくれ」

「わかりました」

わたしは、赤い袋を、ふところ深くしまいました。

その夜の事です。おねえさんがやってきて、こういいました。

「モウルと扇を返してくださいな。あれは、わたしの大切な道具なの」

「ありがとうございました。お返しします。おねえさんのおかげで、人間の国に帰れることになりました。なんとお礼をいっていいやら」

「そう思ってくれるなら、こうしてくださいな。人間の国に帰ったら、雷のカムイの一族を祀ってイナウを捧げ、お酒や食べ物をお供えてください。そうすれば、わたしたちはカムイの世界で格があがり、お供えで、りっぱな宴を開くことができます。ほんの少しのお供えでも、カムイの国にいくと、山のようなお酒やごちそうになるのですからね」

「そうなんですか！ わかりました。必ずそうします」

「父や兄がひどいことをして、ずいぶんお腹立ちでしょう。でも、兄とて、あなたを好きになつてしまっただけで、悪気はなかったんです。どうか、許してやってくださいね」

「もちろんです。帰って、にいさんに会えるんなら、わたしはなんにも恨んだりしません」

「よかった。祀ってくれるなら、わたしたちもあなたを守ってあげましょう。さびれていたあなたの村も、にぎやかにしてあげましょう。あなたも、いつまでも独り身ではないけませんよ。兄たちが、また悪い気を起こすといけませんからね」

おねえさんは、につこり笑って、わたしの手をしっかりと握りました。

つぎの朝のことです。雷のカムイは、箱のなかから龍の模様のついた刀の鏢を出して、わたしにくれました。

「これは、わが一族の模様を刻んだ鏢だ。人間の娘がカムイの国にきたのに、みやげ一つも持たせないというわけにはいかなからな」と笑いました。

それから、雷のカムイの奥さんがきて、大きな箱のなかから、やはり龍の模様のついたりつばなシトキを出しました。首飾りにさげる飾りです。

「わたしはこれをあげましょう。だから、おいしいお酒を作つて、そのうちの少しでいいから、わたしたちにも供えてくださいね」といいました。

「はい、そうします。忘れません」

わたしは、いよいよ家に帰れるのだと、胸が高鳴りました。

外に出ると、わたしをさらった男たちがいました。
一人が、ふところから小さなものを取りだしました。それをパタパタと広げると、皮の小舟になりました。

「さあ、そこに乗りなさい」

わたしが乗ると、男が一人、また一人と乗りこみました。

「さあ、出発だ」

舟はすうつと浮かび、それからいきなり、すごいいきおいで飛んでいきました。

ゴウゴウと風が耳を切ります。一つの天を抜けると、その下の天があり、その天を抜けると、また下の天があり、なつかしいエンジュの木が見えてきました。舟は、エンジュの木のそばにすうつと降りていきました。

エンジュの木に、なにか引つかかっています。よく見ると、なんとそれは、わたしの遺体ではありませんか。あの時のままに、枝に引つかかり、ぶらさがっているのです。だらりと垂れた手足は腐り、骨まで見えています。

男たちは、木からそれをおろすと、新しい体に作り直してくれました。けれども、どうしても小指が一本足りません。

男たちは、しかたなしにエンジュの小枝を折って、小指にしました。散らばっていた首飾りや耳飾りの宝物も、残らず拾いあつめて、荷造りをしてくれました。「さあ」といわれ、わたしは自分の体に飛びつきました。それつきり、なにもわからなくなってしまうました。





気がつくくと、わたしは自分の体のなかにもどり、地面に横たわっていました。起きあがり、むちゆうで走って、にいさんのいる家まで行きました。おどろいたことに、家にはすつかり草のつるがからまっています。にいさんは、無事でしようか。

荷物を持つてついでにきた男たちが、捨て台詞のようにいいました。

「娘よ。おれはまだあきらめていないぞ。おまえが若くてきれいなうちに、きつとまた迎えるにくるからな。覚悟しておけよ」

男たちが空に飛びたつと、ものすごい音が響きわたりました。

「にいさん、にいさん。わたしです。いま帰ってきました！」と家にかけてむと、にいさんは、床にふせていました。わたしの顔を見て、幽霊でも見たような顔をしています。

「にいさん、わたしです。帰ってきたんですよ。雷のカムイに許してもらって」

「そうか、そうか、帰ってきたのか。よかった、よかった」

にいさんは、わたしに抱きついて、おいおい泣きだしました。

わたしも泣きながら、カムイの国であったことを、すべてにいさんに話しました。にいさんは、何度も何度も深くうなずき、わたしの背中をなでながら聞いてくれました。

わたしが話しおえると、にいさんはさつそく、囲炉裏ばたで雷のカムイに祈りを捧げました。そして、ていねいですが強い口調で、こういいました。

「カムイが人間の娘をさらうなど、とんでもないことです。カムイはカムイとだけ、人間は人間とだけ、結ばれるべきものです。カムイといえども、それを破れば、罰を受けることに

なりますよ。妹には、人間の国で人間らしい一生を送らせてやってく下さい」

いいおえると、にいさんはすっかり顔色もよくなり、あたりを片づけはじめました。

やがて、家もすっかり元通りになりました。わたしたちは、雷のカムイをお祀りし、季節のおいしいものを捧げました。お酒を造ったときには、まつさきにお供えます。

雷のおねえさんに、いつまでも独り身でいてはいけないといわれたという、にいさんは川上の村から、美しい若者を連れてきて、結婚させてくれました。わたしたち夫婦は、にいさんの家のすぐ北に新しい家を建て、暮らしました。じきに、にいさんにもお嫁さんがきました。にいさんのところにも、わたしのところにも、子どもがたくさん生まれて、にぎやかになりました。いつのまにか、あちこちから人が集まってきて、村もすつかりにぎわい、栄えました。

わたしは、いつまたカムイがさらにくるかと心配でなりませんが、そんなことはもうありませんでした。雷のカムイをしつかりお祀りし、お祈りもお供えも欠かさなかったためでしょう。それからというもの、なにかもが満ちたりて、こんなしわくちやのおばあさんになるまで、ずうつとしあわせに暮らしているのですよ。

と、娘のころに雷を打ち負かして帰ってきたおばあさんが、語りました。